教材活用シリーズ　第77回

☆日図協加盟出版社の発行している教材について、実際の授業における活用例、より効果が得られるポイント（場面・方法）などをご紹介します。

音読の基礎的な力を育てる『話す・聞くスキル』
～ユースウェア（使い方）で子どもの音声言語力は飛躍的に伸びる～

㈱正進社
『話す・聞くスキル』
グレード①～⑥

小嶋（こじま）　悠紀（ゆうき）
（長野県上田市立中塩田小学校教諭）

小学校教師の多くが次の点で頭を悩ますことが多い。

「低学年の時は、大きな声で音読できる。しかし、高学年になると声が小さくなって大きな声で読めない。発言も小さな声になってしまう。」

「高学年になると思春期だから、恥ずかしがって声を出さないんだよ。」

というような意見もある。

しかし、私はこの意見に反対である。なぜならば、私が担任してきた6年生はどのクラスでも大きな声で全員が音読できたからである。発言もどの子どもも自信をもって堂々としたものであった。

その基礎的な力を育てたのが『話す・聞くスキル』であった。その『話す・聞くスキル』が2015年度に大幅に改訂された。より子どもたちが楽しく声を出して学べる教材に進化した。

今回の改訂で「教師用」が新たに加わることになった。

従来の『話す・聞くスキル』だけでも子どもたちは積極的に声を出して音読することができていた。しかし、なかには授業を行うことが難しい教材もあり、実際に授業場面で戸惑う先生方もいた。また、教師の技量の高い教室では大きく盛り上がるのに対し、新卒教師など技量がまだまだ未熟な教室では盛り上がりに欠けてしまうという事態も生じていた。教材には「ユースウェア（使い方）」がもっとも重要である。ユースウェア通りに授業することで、教材は真の効果を発揮する。

例えば、改訂版『話す・聞くスキル』グレード①に登場する「ゆきが　ふる」（まど・みちお作）という詩がある。そのまま読んでも、リズムがあり楽しい詩である。しかし、これを劇的に盛り上げる授業がある。それが『「ふるふる隊」をつくろう！』というパーツである。

教室の女子と男子で読むパートを分ける。男子が「ふるふる　ふるふる　ゆきが　ふる」を小さな声でずっと読み続ける。その間に女子は、詩の全文を音読していく。音読される詩の後ろで、同じリズムであたかも合唱のように「ふるふる　ふるふる　ゆきが　ふる」

●『話す・聞くスキル　グレード①～⑥』（正進社）

が聞こえてくる。そして、最後の一文では全員が揃って大きな声で「ふるふる　ふるふる　ゆきが　ふる」を読む。読み終わった瞬間、どの教室でも「気持ちいい！」と歓声が起こる。そして「先生！もう一度読もう！」と熱烈なアンコールが生じる。それほど盛り上がる構成になっているのだ。

これは、ユースウェア通りに教材を使った結果である。実際の教師用を見てみると、指示する言葉が順番に並んでいる。誰でも授業することができる。このことでどの教室でも同じように盛り上げることができるようになっている。実際、教職経験のない大学生にユースウェアセミナーなどでこの教師用通りに授業をしてもらった。大学生は教師用を読み進めただけである。これが見事な授業になったのだ。参加していた多くの教師が驚愕していた。教材のユースウェアの重要性がこの事例からもおわかり頂けるだろう。

『話す・聞くスキル』にはもうひとつの特徴がある。それは、「発達障がい」のある子どもたちも活躍できるユースウェアの工夫がされていることだ。ＡＤＨＤ（注意欠如・多動症）と呼ばれる子どもたちは、落ち着きや集中力がなく、テンションも高い。普段の授業では「落ち着きなさい」「声を小さくしなさい」など注意を受けがちになってしまう。

『話す・聞くスキル』のなかには、「おーい、こっちだよ！」「マダムになろう」「雨」など「音声言語に親しむ」教材が配置されている。これらの教材に発達障がいをもつ子どもたちが特に熱中することが多くの教室から報告されている。

例えば、「マダムになろう」である。まずは、ユースウェア通りに読み進める。この段階でもＡＤＨＤの子どもたちは、かなりのハイテンションと演技で読むことができる。それくらいの力をこの教材がもっている。そして最後に「マダム同士で会話をしよう」というパーツを入れる。ペアで練習させたのちに、立候補で2人の子どもに全員の前で「マダム」となって会話をさせる。間違いなく立候補してくるのが、クラスのやんちゃやＡＤＨＤ傾向のある子どもたちである。その迫真の演技力に教室中が大爆笑の渦に巻き込まれる。やり終えた子どもたちは、どの子も満足げな顔をしている。普段は、教師に注意されるＡＤＨＤの子どもも一躍教室のスターとなり、子どもたちの見る目が変わる。

2
役になりきる
読んで音読
マダムになろう
月
日
おいよみ
こうたいよみ
みんなよみ
ひとりよみ
はんぶんよみ
チャレンジ
コンテスト
役になりきって読むことができたか
そろそれ
できた
むずかしい
1 ゆうれいになろう
「うらめしやー。」
「こわいよー。」
「ひー。」
2 おじさんになろう
「やいやい、何だって、おれの顔を見て笑うんだい。」
「じょうだん言うない。」
「おいおい、何やってるんだ。」
3 マダムになろう
「あーら、おくさま。お元気ですか。」
「まあ、うちの子どもは、できがいいのでございますよ。」
「おたくの子どもは、ゆうしゅうでございますわね。」

●グレード⑤「マダムになろう」（左：教師用書／右：児童用書）

このように効果的な教材と、一つひとつの教材に対する授業案とユースウェアが確定しているのが改訂版『話す・聞くスキル』の最大の特徴である。

教科書の音読と並行してこの『話す・聞くスキル』で指導することにより、どの年齢の子どもも大きく声を出す基礎となっていく。

さらに、音読を脳科学的に見てみよう。音読は「視覚入力（文字を読む）、聴覚入力（音となった文を聞く）、音声出力（声に出す）」といった3つの情報処理回路を使っている。音読の苦手な子どもは、この3つの回路のうち、どこかにエラーが起っていることが考えられている。これらを克服していくには、トレーニングが必要になってくる。そのような脳の機能的な問題を抱える子どもたちに、長文の教科書を与えて読ませるとどうなるだろうか。大きな抵抗感を抱いてしまい、声も小さくなる。教師からも叱責される。失敗経験だけが積もってしまう。

しかし、『話す・聞くスキル』は、短文で連続して何回も読むことができる。眼球運動も頻繁に生じ、相手の言っていることを聞くということも求められ、相手と併せて声を出すことが必要とされる。これが、前述した3つの情報処理回路を適切に鍛えていくことにもなる。これもユースウェア通りに行っているからこそできることでもある。

『話す・聞くスキル』はどの教室でも盛り上がり、効果がでる教材である。さらにユースウェア通りに使うことで子どもの音声言語力を飛躍的に伸ばすことができるだろう。